

## 神奈川からがんをなくす会(ACクラブ)

### 総 括

昭和51年に当会発足の淵源を持つ胃と肺の早期がん発見を目標とした完全な個人検診が始まって以来30年を経過した。個人を診察、検査、説明などの対象としているために健康、身体に関することが様々な形で俎上に乗り、敢て「肺と胃」といった当初の検診目標ととどまらないことから希望に応じてすべての「がん」を対象にすべきと考えたが、医学的には云うべくして不可能である。従って相談には応じて可及的に可能な限り検診のルートに乗せるか性別の特有な疾患も含めて(Anti Cancer)のシステムとしたものである。本年度で男女総数は342名で189:153、男性は消化器系と肺に関心があり、女性は消化器系と子宮・乳房との併用が多い。肺・消化器系と夫々単独受診は33名、14名である。(表1)表3、5、7、8、9、10にみるように各臓器別、検査別にみても本年度は子宮体がん1例が発見された。ドックを視野に入れた付加検診(表11)では世上メタボリックシンドロームと騒がれるように、やはり血中脂質検査での有所見者数は50%である。

### 消化器がん検診

平成18年度に消化器がん検診を受診したのは295名(男161名、女134名)であった。このうち胃がん検診としてX線検査または内視鏡検査を受診したのは186名(男96名、女90名)で128名(69%)は異常なしで、胃がんの発見はなかった。

腹部超音波検査を受けたのは243名(男132名、女111名)で、肝臓・胆のう・膵臓・腎臓のがんは発見されなかった。

大腸がん検診の免疫学的便潜血検査をうけたのは239名(男128名、女111名)で、二次精密検査をうけた7名から大腸ポリープ6例と結腸憩室1例が発見されたが、大腸がんはみられなかった。

### 肺がん検診

当会発足時は肺及び胃に限ってがんの早期発見を目的としとくに肺の分化型肺がんについては細胞診検診も含めて著明な効果を挙げた。著明な効果とは、即ち当所としては平成8年までCTは導入されなかったために従来からの単純胸部X線撮影によって如何に早期の肺がんを発見するかは世界中の肺がんハンターの関心事であった。それには定期的な年二回の検診と比較読影以外にないとの私共の結論からこの方法を採用してきた歴史を持つ。しかしCT

が導入されるやその画質の従来X-Pとの差は全く異ったものであり性状の如何を問わず、陰影の有無は歴然たるものがあり、またその認識しうる陰影の大きさについても格段に小さい。現在CT検査は年一回で即ち肺がん検診の隔回毎に行ない、CTを行わない時は単純X-P一方向としている。喀痰細胞診は従来通り。本年度に肺がん例はない。表参照。

### 乳がん検診

乳がん検診は17年度より担当者が代わったため検診方法も変化し、それまでの毎年MMG3方向であったのを、より今日的なMMGとUSを各個人に合わせて最適と思われる方式で行うように変化させている。18年度はまだ新方式の最初でUS検診者が69名と、MMG検診者の33名より多くなっている。穿刺細胞診は当所で行い、組織診の生検は可能な施設に依頼する予定だが、相当する症例はなかった。精検率は3%で標準以下なのは再診が多いため、通常癌発見率は0.1~0.4%なので100例程度ではないのは当然であろう。このような言わば限定された対象群からの発見乳癌は少ないし、対象年齢層は55歳より74歳と比較的高齢者が多く、乳癌症例が少ないのは当然だが、最近高齢者の乳癌は増加傾向にあり、心理面でも乳癌を検診対象から外すのは適切でない。

### 子宮がん検診

ACクラブ女性会員で平成18年度受診された方153名(前年度152名)中、子宮がん検診受診者は93名(60.8%)であった。

頸部細胞診の結果、クラスⅢaと判定された方が1名あったが、診断は萎縮性膣炎でエストロゲン投与で治癒した。

頸部細胞診に引き続き体部細胞診を希望された方は85名(91.3%)、その内陽性判定となった方が1名あり、ただちに県立がんセンターに紹介したところ類内膜腺癌Ⅰ期で、浸潤軽微の早期癌で現在全く障害なくご活躍である。この症例は受診の際は全く訴えない所謂無症状体癌で、近年、厚労省体癌指針では、出血等を認めたら病院受診を勧奨することと、当初より後退している中で、ACクラブ会員の中からこのような症例が出た意義は大きい。

関係の集計表は98頁に掲載